



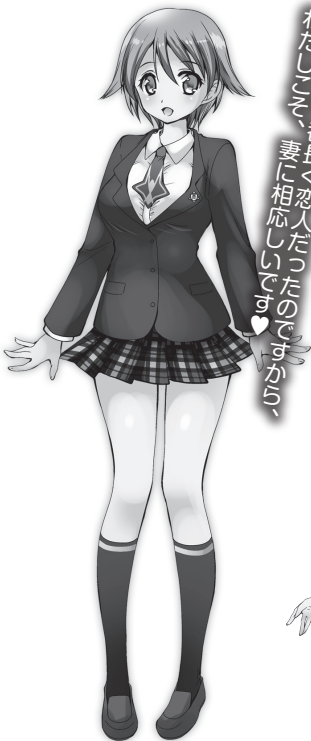
立ち読み版

わたしが
ゼツタイ

妊娠するもんわ!

幼なじみの正妻戦争

小説 大熊狸喜 挿絵 黒澤清崇



わたしが一番長く恋人だったのですから、
わたしこそ、妻に相應しいですから、

なつもりはな
夏森華

保育園二、三年生の頃を一緒に
過ごした、おらかで大人っぽい
性格の少女。面倒見がよく、
身の回りのお世話が得意。



あたしが最初に婚約したんだから、
あたしが奥さんに相應しいもんから、

はるのももみ
春野桃実

保育園一年生の時に仲の良かった
明るくて快活な少女。料理が
大好きで、その腕前は他の女子
が羨望するほどに天才的。

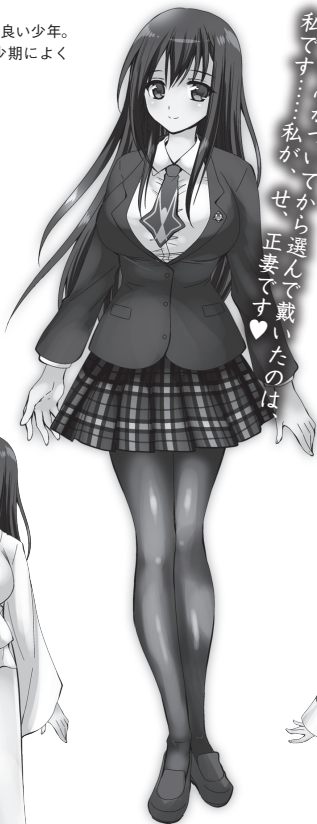


NIGHT
WEAR

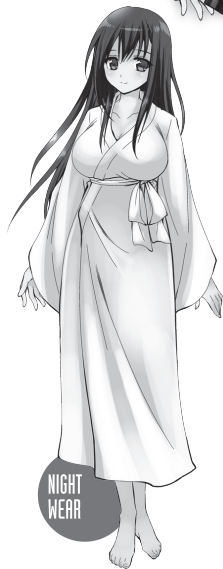
しずゆきわたる

静雪涉

優しい性格で人当たりの良い少年。
父の仕事の関係で、幼少期によく
引っ越しをしていた。



も、物心がついてから選んで戴いたのは、
私です……私が、せ、正妻です♡



NIGHT
WEAR

あきやまりり
秋山莉凜

初等科一年の頃に約束をした
少女。艶やかな黒髪、無口で
恥ずかしがり屋なのに爆乳ダ
イナマイトボディという女と
して勝ち組な女の子。



NIGHT
WEAR

プロローグ 保育園く初等科ぶりの再会

第一章 正妻戦争 開始！

第二章 お昼寝の時間

第三章 ブランコの思い出

第四章 二人のアイスクリーム

第五章 正妻戦争 激化！

エピローグ まだまだ続く、正妻戦争！

007

014

058

100

143

186

241

「ああ、疲れた。今日一日で、色々あったなあ……」

お風呂にも入って自室に戻ると、渉はベッドにゴロりと転がる。とにかく、幼なじみたちとの共同生活が始まるのだ。

「みんな良い娘みたいだし、何とかなるよね……ふわわ……」

いつの間にか、眠りに落ちる渉――。

と、浅い眠りの中で、肉体的な違和感を感じる。

(……………んん……………?)

違和感はすぐに実体感となって、少年は目が覚めた。

何だかベッドがランダムに揺れている感じがする。時計を見ると、眠ってからまだ十分ほど。

時間を確認していたら、何だか下半身に柔らかくて温かい重みを感じる。

「?　なんだ……うわっ!」

枕元のリモコンで照明を点けたら、掛け布団がモコモコと膨らんでいた。慌てて布団を捲いたら、なんと女子たち三人の姿が。

「み、みんな何してるの!?!」

「みんな……?　ああっ、華と莉凜!」

「あら、桃実ちゃんに莉凜ちゃん……!」

「ハっ…桃実さんと華さんが…っ！」

自分以外の女子の存在に、三人とも気づいていなかったらしい。寝ていた少年の腰の辺り、右側に桃実が、左側に莉凜が。

そして足の上には、小柄な華がボックスステイッシュを胸に、乗り上げていた。

桃実は、ピンクに透けた、リボン付きのミニなネグリジエ。下着は着けているものの、縦長の臍まで透けて見えていて、つい捲つて、もつと見たくなる。

華は、ちよつとブカブカっぽいパジャマ。可愛いアニマル柄で、小柄な身体と相まって、抱き締めてナデナデしたくなる。

莉凜は、なんと純白の長襦袢だ。サラサラで艶々の長い黒髪と相まって、しかもバストがタツプリと実っているから、今すぐ抱き付いて胸に顔を埋めたくなってしまう。

女子たちも、お互いに相手の就寝着に注視して、無意識にも競い合っている様子だ。

「「むむむ…！」」

どうやら、三人揃って夜這いに来たらしい。

お互いに一歩先に出ようとして、鉢合わせ。という状況だ。

「二人とも、抜け駆けなんてずるいです！」

「涉ちゃんにブルーベリー勧めたの、あたしだもん〜！」

「わ、私だけ、出遅れるワケには…っ！」

三者三様に自己主張しながら、火花を散らす少女たち。

対して渉は、脚部に触れる女子の肉体に、軽い戸惑いと盛大な興奮を覚えていた。

(こ、これは、まずいぞ……！)

腰の左右から女の子に密着されて、少し開いた脚の間にも女子がいる。

しかも三人とも気づいてないけど、柔らかくて温かくて恵まれた胸部が、まさに下腹部や股間部分に、むにゅり、と押しつけられているのだ。

女子たち特有の、フンワリと甘い香りだけでなく、清潔な石けんの香りも漂う。軽い体重と柔らかい肢体がパジャマ越しでも解つて、裸の女体をリアルに感じてしまうのだ。

こんなに女体密着をされてしまうと、少年の肉体は素直に歓喜の欲求を表し始めた。ブルーベリー効果もあるのか、股間の一箇所、熱と力が急速に集まってゆく。

「あ、あわわ……ちよつとみんな……っ！」

「……えっ——ひゃあああっ！」

少年の声に気づいた少女三人が、綺麗にハモって可愛い悲鳴を上げた。

女の子の目の前で、渉のパジャマの腰部分が、ググウつと力強く、中から突き上げられている。

女子たち三人は羞恥しながらも、衣服越しとはいえ初めて見た男子の臨戦態勢から、目が離せない様子だ。

しかし数瞬だけ視線を奪われると、三人いるから勇気が出たのか、突如、共同戦線を張ってきた。

「あの、涉ちゃん…っ！」

「こ、これって、その…っ！」

「わわ私たちに、あの…興奮、なさって…」

なら責任を取らなければ。妻として――。

三人が自己解決的に納得して、コクリと息を呑む。ウンと頷き合ってキュッと目を閉じると、少年のパジャマに、震えながら細い指を掛けた。

「わわっ、待ってっ――」

「…え、えいっ！」

強い責任感に押された三人がパジャマを下げると、少年の逸物が姿を現す。

恐る恐る目を開けた乙女たちは、初めて見る男性器に、また揃って悲鳴を上げた。

「…っ――ひやあああああっ！」

剥き出しにされた男性器が、生まれて初めて、女子の視線に晒される。

ビっシビシに張り詰めた勃起は、天を向きながら更に身を反らして、原初的な欲求を見せ付けていた。

全体は子供の手首ほどに太く、長く、鼓動に合わせて脈打っている。

先端の亀頭部分は大きく発達して、カリ部分も盾のように肉高い。しかも女性を知らないから、全体は綺麗なピンク色だ。

本体はガッシリと太くて堅く、表面の皮膚はパンパンで艶々。根元に向かって太さを増して、幾筋もの血管がドクドクと、熱くて強い血流を見せていた。

生まれて初めて直視した男性器の姿に、未だ口づけどころかデートすら未体験な、操を護ってきた乙女たちは、怯えている。

「こ、こ、こ、こっ子供頃と、違うじゃない——っ！」

「こ、怖いですううう……！」

桃実と華と同様に怯える莉凜だけど、その表情は天然で、別物だった。

「な、なんと逞しい……っ！」

目は怯えているし身体は一番震えているのに、まるで魂まで奪われて服従するような、ウツトリと蕩ける美顔。

処女なのに淫美性溢れるその官能フェイスは、それだけで男性の理性を破壊しそうなほどの魅力があった。

「あ、あの……そんなに見られると……」

女子たちにジッと見られるのは、意外と恥ずかしい。

しばし怯えた乙女たちだけど、渉がパジャマを戻そうとしたら、ハッと気づいた。

「ハっ——お、怯えてちゃっつ、ダメだわっ!」

「そ、その通りですっ! こ、この怖さを乗り越えずしてっ!」

「どうして、妻と名乗れるでしょう…っ!」

ポニテ少女とショートカットガールが、ペニスに触れようと、震えながら手を伸ばす。対して一人、黒髪少女が異を唱えた。

「あ、あの…:だ、男性の…あ、アソコには、その…:女性の乳房が、とても心地良いのだと…:母が購読している雑誌に、講釈が載っておりました…!」

「乳房って…お、おっぱいで触るって事っ!?!」

莉凜が偏った知識を披露すると、残る二人も動揺する。三人はしばし悩んだ後、再びウンと領ぎ合つてモジモジと躊躇ためちいつつ、それぞれの就寝着を静かにはだけ始めた。

桃実はネグリジエを捲つてブラを脱いで、華はパジャマのボタンを外し、莉凜は襦袢の前を開ける。

プチプチ…はらり…。

「み、みんなっ——わわっ!」

少年の目の前に、少女たち三人のバストが露わにされた。

「きゃっ…♡ 涉ちゃんたら、そんなに見て…♡」

明るく言うポニテガールだけど、バストを隠さない程度に寄せる両掌の指先が、恥ずか

しさに震えている。

桃実のEカップバストは、丸くて形良く実っていて、先端も綺麗な桃色。ツンと媚突を上向きに尖らせて、愛らしさをアピールしている。

「渉さんに、み、見られてます…♡」

恥ずかしさで躊躇いつつ、それでもボタンを全部外したショートカット少女。

華のDカップおっぱいは、プルンと丸く弾んで可愛らしく、乳首もやや薄い桃色だ。小さい乳輪もプクンと膨れて、健気さを感じさせていた。

「わ、渉様がっ…喜んで下さるっ、のなら…っ!」

羞恥にドモリながら、細い肩をすくめて純白の襦袢をスルリと滑らせる、黒髪の乙女。莉凜のHカップ双乳は、大きくてタツプリと丸く、エッチな迫力と官能性を溢れさせている。白い乳肌に対して先端部分は桃色で、美味しそうな魅力を見せ付けていた。

目の前に晒された三人の柔乳に、少年の視線は完全釘付け。一瞬たりとも逸らせない。同時に、黒髪乙女の爆乳に、女子である桃実も華も、つい感想が漏れてしまう。

「す、凄い…っ!」

「ああ…渉様…そ、それでは…っ!」

愛しい少年の視線に、爆乳を抱き上げても隠す事はしない莉凜。黒髪の乙女は頬を染めて耐えつつ、生涯初の、バスト愛撫のスタートを切った。

三人の少女は、自らの双乳を両の掌で支え上げる。

柔らかく持ち上げられたそれぞれの乳房は、そのまま女体の柔らかさを見せていて、渉の視線を惹き付けながら、更に欲求を倍増させてゆく。

乙女たちは、強い視線を媚突に感じながら、コクリと緊張の息を吞んで、堅く天を突く少年の勃起を押し包んだ。

——ぶにゆり…。

「んん…：…なんか、ドキドキするう…。」

「あふ…：あついです…。」

「…：…はあ…：…こんなに、堅くて…：ご立派なんて…。」

三人のバストに圧迫されると、勃起本体がマシユマロで締め付けられるような、不思議で心地良い感覚。自分の掌で握る感じとは、全く、完全に別ものだった。

おっぱいで包まれた勃起は、それでも谷間から頭を覗かせるほど、長く太く、自らを誇示している。

何だかペニスよりも熱い気がするオッパイは、シットリと汗ばんでもいて、少女たちの興奮まで伝わってきた。

三方から押し当てられて締め付けられると、性本能が強く刺激される。もっと強く興奮が欲しくて、焦らされる感じが切ない。

「うう……なんか、気持ち良い……っ！」

つい言葉が漏れると、少女たちの美顔がホッと熱を上げた。

「涉ちゃん、気持ち良い……？」

「……そうなんですか……うれしいです……♡」

「そ、それでは……んくん……ご奉仕を……。確か、強く押しつけながら、上下に優しく、です。それでは……ん……ん……」

莉凜の合図で、三人同時のパイズリご奉仕が始められる。プニプニのバストで柔密着をされながら、ムチムチと上下に摩擦を施された。

——むちゆり、むにゆるむにゆり、たぶりゆぶりゆるむちゆるむちゆるりゆる……。

三人のタイミングが合わなかったのは最初だけで、すぐにシンクロした上下動になる。

先端に向かって柔らかく絞り上げられると、腰の真ん中に集められた力が引っ張られるような、ジリリとした焦燥感。

根元まで包み絞られると、このまま出したいと感じてしまうほどの幸せ感で、心も下半身も包まれてゆく。

少女たちの乳肌はスベスベなのに、薄く汗を纏ってシットリと吸い付く感じもする。

熱く縋って押し包まれるバスト奉仕に、思わず臉が閉じて、更に深い性感の渦へと引き込まれてしまう涉だ。

「はああ……んん……」

吐息が漏れると、少女たちには感じ入るものがあつたらしい。

「涉ちゃん……可愛い……♡」

「そんな愛しい顔、されてしまうと……」

「ああふ……私たちも……んん……」

愛しい少年が感じている事実が、女として嬉しい様子。湿った吐息をこぼしながら、三人の肉体も熱と興奮が強まってゆく。

密着するバストがジワりと熱くなり、勃起の肌に触れる桃色媚突も、きゅう……と硬化を表していた。

「ああ……わ、私の……胸が……っ！」

媚突から感じる勃起肌の温度と堅さとサラサラ感で、莉凜の女体も妖しく興奮の熱を上げてゆく。

同じく、華と桃実も、ペニスと触れ合う乳頭部分から強い性感を得始めていて、美顔が汗ばみ頬が上気し、臉が切なげにトロンと蕩ける。

「わ、涉ちゃんの……凄く、エッチだから……んん……っ！」

「わたしも……もつと、強くしたいです……」

勃起に触れながら、隣同士の乳首も触れ合って転がり合う。乳房全体が熱と官能に包ま

れると、女子たちの腰も切なそうにモジモジと、左右にくねられた。

「やんっ…胸同士が、擦れちゃうよう…っ！」

「あふっ——じ、女性同士っ、ですのに…っ！」

敏感な箇所が触れ合うと、乳首から背中までが鋭くて甘い性感で貫かれるようだ。

「なんだか…んふ…恥ずかしいですけど…とても、ドキドキ…！」

複人数での、熱くて堅い男性器への乳房奉仕。それだけでなく、媚突同士が触れ合うエッチなタッチで、女体の官能がグンっ和高められてゆくらしい。

より強く熱く、勃起を包む六つの乳房。

「涉ちゃん…すぐく、熱くて…あは♡」

三人の熱い吐息が亀頭部分に掛けられると、先端の鈴割れから透明なガマン汁が、プクンと溢れる。

熱と柔らかさの愛撫を受け続ける下腹部が、射精を求めてギュウユ…と、力んで硬直を強めてゆく。

「あふ…：：：涉様が、こんなに…喜ばれて…♡」

少年の反応が嬉しい三人は、再び莉凜の合図で、バスト奉仕の速度を上げてきた。

——つたぶたぶゆるしゆりゆむちゆるっ、たぶたぶたぶたぶりゆるりゆるりゆるっ！

「んんんっ——す、凄くっ、締まって…っ！」



無意識に横寝になって向き合う恰好になると、ドキドキしながらも、不思議な安心感で心が包まれてゆく。視線が合うと、恥ずかしいけど、とても懐かしい感じ。

涉の、無意識の横寝や恥ずかしさの正体は、少女が話してくれる。

「へへ……保育園の頃も、こんな風と一緒に昼寝してたよね♡」

「ああ……そうだったよね」

保育園でのお昼寝の時も、桃実がいつも右隣だった。今みたいに向き合ってオシャベリをして、いつの間にか眠っていた。

子供の頃は無邪気に向き合っていたけれど、心情的にも肉体的にも、今は全然違う。

大きな瞳がジッと見つめて、熱っぽい光が感じられる。添い寝の女体は制服の上からでもセクシーな曲線を魅せていて、年頃の少年としては、どうしても性を意識してしまう。

（な、なんか……思い出してきたぞ……色々）

無邪気に手を握ったり足を絡ませたり、冬にはお互いの腋の下に手を入れて、素直に暖かさを楽しんだり。

（まあ、今はそんな事出来ないよね。第一、もう子供じゃないんだし）

色々と思いついて、自分の顔も赤いだろうと予測出来る。心臓もドキドキしているし。

なんて考えていたら、少女の方から驚くような発言がされる

「ね、涉ちゃん覚えてる？ 冬とか、こんな風にして暖め合ってたよね♡」

桃実が渉の掌を取って、自らの脇腹に導き入れる。

「わわっ——あの、桃実…っ！」

思わぬ行為に、心臓がドッキンッと跳ねた。ブレザーの中で触れたのは、ブラウスの上からとはいえ、保育園以来の、桃実の脇腹。

昔と同じく柔らかい手触りで、昔よりもずっと温かい気がする。何より、触れている事そのものに、心臓の鼓動が高まってきた。

つい指先に力が籠もると、プニプニな肌がピクンッと反応。

「ひゃっ——もう、渉ちゃんのエッチ♡」

「え、あ、その…っつい、気持ち良くて…っ！」

桃実が恥ずかしそうに責めたのは、腋の下の事だけではなかった。少年の足が無意識にも、子供の頃と同じように、少女の腿に絡んでいたのだ。

スベスベの腿を抜けてヒザに絡まり、まるで自分の方へと引き寄せるように、ヒザ同士で抱き合って導いている。愛しい少年のそんな行動を、笑顔で受け入れている桃実。

子供の頃は、こんな風にお昼寝していた。

「えっと……」

柔らかい脇腹とムチュムチの腿。触れ合う肌と見つめられる濡れた瞳に、心臓の鼓動が高まってゆく。

肉体の興奮が下腹部に集まって、ズボンの前が大きく堅く、突き上げられてきた。渉が羞恥して焦ると、桃実にも伝わってしまったらしい。

「……きゃっ——わ、渉ちゃん……」

「ご、ごめん……雰囲気、なくて……」

素直に詫げる渉に、少女は安堵感にも似た愛慕を感じたらしい。

「渉ちゃん……嬉しい……♡」

そう呟くと、桃実は上体を起こして、干してある大きな布を一枚拝借。頭上からフワリと纏うと、仰向けに転がった少年の身体に、ユックリと跨がった。

「も、桃実……」

「渉ちゃん……あん……また、おつきくなってる……♡」

布で隠れた少女を、腰に乗せる渉。先日の騎乗位素股を思い出してしまい、股間は余計に力を増してゆく。

屋上という開放空間だけど、学校でもある。しかし、干し物の海で布の山に隠れているし、どこか秘密めいてもいて、余計にドキドキしてしまっていた。

「あたし、渉ちゃんの奥さん候補だもん……子供の頃と違って……いつだって、渉ちゃんに応えられるよ……♡」

そう笑顔で呟くと、桃実は上着を脱いで、ブラウスのボタンを外して、白い肌を露出さ

せる。更に白いブラを外されると、大きな双乳がタップンと溢れ出た。

騎乗位姿勢で少しだけ下向きだから、質量を増して丸い形で、柔らかそうに揺れている。

「いつ見ても：大きくて、綺麗だね」

「わ、涉ちゃんが喜んでくれるなら：うれしい：♡」

少年の言葉に、嬉しそうに頬を染める桃実。乳房に突き刺さる視線が恥ずかしくて、つい肩をすくめるものの、桃色の乳首を隠す事はしない。

愛らしい仕草に、男の本能が脈動してゆく。腰にかかる軽い体重も、頼られているみたいで、勃起が後押しされていた。

両手を伸ばして柔らかい腿にソッと触れると、少女の吐息が敏感に跳ねる。指先で優しく内腿を撫でたら、スカートの中はフワッと熱を帯びていた。

「あんっ、涉ちゃん：♡」

もっと深く触れたい。

そんな少年の欲求を理解したポニテ少女が、ミニスカートの前を自ら捲る。

桃実が少し腰を浮かせたから、ブラと同じ純白のショーツが見えた。

ネグリジェにリボンが付いていたから、リボンが好きだと知っていたけど、ショーツも左右を大きなリボンで結んでいるタイプ。

「ほ、解いてみる：？」

「えっ——いいのっ?」

女の子のショーツを解くなんて、初めてだ。渉はドキドキしながら、焦る指でリボンを摘むと、ユックリと引つ張る。

「あん……」

スルリと解放されたりボンがハラリと解けると、桃実の全てが晒された。

布を失った下腹部は、程良い皮下脂肪の曲線が柔らかさを魅せている。緊張と羞恥で震えているけど、少女は少年の視線を遮る事はしない。

スベスベな下腹部から下ると、清楚な割れ目が見える。閉じ合わされた谷間は濃い桃色で艶めいていて、渉の視線に耐えていた。

「さ、触って、いい……?」

「う、うんっ——きゃん……っ!」

指先で優しく割れ目を撫で上げたら、桃実は全身を跳ねさせ硬直させた。

内腿よりも温かい柔肉を往復すると、プニプニした閉じ目がムチュンと反応をして、艶を増して、渉の指先に艶液が触れる。

「桃実、濡れてるね」

「だ、だってえ……涉ちゃんが、触ってるからっ——ひゃあんっ!」

恥ずかし告白をさせながら、指で優しく割れ目を開くと、少年の目に初めて、桃実の秘

処が晒された。

少女の処処は、桃色を強めて蜜を含み、興奮を示している。上端の肉芽は半身を覗かせていて、恥蜜を纏って恥ずかしそうに震えていた。

左右に続く極薄い花弁は、小さくて形が整っている。柔らかく濡れる粘膜は小さなシワを魅せていて、女性器そのものの柔軟性を確信させた。

小さく膨れる尿口を過ぎると、やはり小さな、濡れた膣孔が見える。ツルツルの会陰を越えると、濃い桃色の後孔が小さくシワを集めて、膣孔と一緒に収縮をしていた。

「わ、涉ちゃん…そんなに、見ちゃ…あうん…」

少年の視線を敏感に感じるのか、自らスカートを捲ったままの少女は、乳房を震わせて硬直している。

処女性器を直視すると、股間の熱は更に増大。もうズボンがキツくて辛い。

「桃実…僕のを出して」

「ひえっ——う、うん…っ！」

少年の提案に驚きながらも、ポニテ少女は素直に服従。一人で触れるのは初めてだからか、耳まで真っ赤に染めて、震える指でジッパをジジジ…と下ろした。

「こ、これでっ——あわわ…っ！」

陽の下で初めて見た、戦闘態勢の男性器。陽光を浴びて堂々とした逞しい姿に、視線を

奪われつつも羞恥に慌てていた。

「な、なんか…いつもより、凄い…っ♡」

無意識に羞恥の視線を奪われながら、ここ二日で身体が覚えたご奉仕を無意識に実行。

ガッチガチの熱勃起を、震えながら優しく触れるように両掌で掴むと、ユックリと上下愛撫を施してきた。

「か、堅くて、熱くて…ドキドキしちゃう…♡」

トロリと臉を蕩けさせて、まるで使命のように、奉仕を捧げるポニテ少女。

「んん…：桃実…：気持ち良い…っ！」

柔らかい指先で包まれながら、スリスリと上下に、先端から根元までを、たどたどしくも往復愛撫。焦らされるような優しい性感で勃起を責められると、少年の射精欲求がグングンと高められてゆく。

先端の鈴割れから透明なガマン液が溢れると、強い精臭がフワリと漂い、少女の肉体もトクトクと熱を上げる。

ペニスの肌が汗ばんで、少女の裸腰も焦らされるように、モジモジと拙く前後。

渉の肉欲が、桃実を強く求めていた。

「桃実、このまま…っ！」

「う、うん…あ…」

少女の腰をガツシリと両掌で掴むと、ツルツルの肌は既に汗を纏っていて、シットリと吸い付くような手触り。

軽く持ち上げて、濡れた姫処を勃起の直上に位置させた。

裸の開脚秘処を、力強く勃起したペニスに、真下から狙いを付けられる。そんな羞恥と逼迫感に、桃実の意識が軽くパニックをする。

「わ、涉ちゃん…っ！」

緊張に身を固くする幼なじみに、少年は安心して貰いたくて、優しく言葉を掛けた。

「大丈夫だよ。僕の胸に両掌を突いて、息を吐きながら腰を下ろして」

「う、うん…んん…はああああ…っ！」

堅い熱肉が、柔らかい濡れ姫処に触れると、一瞬また身を固くする桃実。しかし少年の言葉に従い、息を吐きつつ、丸いヒップを下ろしてゆく。

胸に乗せられた桃実の両掌が、絶るように弱々しく、学ランに爪を立てていた。

——つぶ…ちぶ…つぶぶ…。

熱い女褌は、堅くて太い肉棒に従うように、膣孔を広げられつつ吞み込んでゆく。絞られるよう包まれてゆく亀頭部分が、より狭いキツさで締め付けられていた。

処女膜に到達すると、少女は最後の一押しに、少年の助けを求める。

「わ、涉ちゃん…あたし、もう…」

「うん…僕に任せて、桃実」

名前を呼ばれてホっとしたと同時に、力が抜けた一瞬。

渉は桃実の腰を引き寄せつつ、自らの腰で突き上げて、少女の奥へと肉突入。

「うんっ——っ！」

——っつぶっ！

「いいっ——ああ…」

キツかった絞りが、一瞬でフワリと優しく包み込まれる感覚に変化。桃実の処女が、渉に捧げられた。

初体験の膣孔から、蜜と一緒に破瓜の鮮血が一筋流れる。

「わ、たる…ちゃん…あたしたち、一つに…♡」

小さくて鋭い痛みを胎内に感じながら、桃実は頬を染めて、涙を浮かべていた。

初体験の少年も、温かくて柔らかいのにヌルヌルと締め付けてくる膣内の感触で、男性本能が強く突き動かされてゆく。

「桃実…もつと、奥まで欲しい…っ！」

ゆっくりと亀頭を進ませると、根元までの完全挿入を果たす。

桃実の膣壁は、細かい粒が無数に蠢いて勃起肌を愛撫する、極上の粒膣壁だった。

「わ、わたる…ちゃん…っ！」

胎内最奥まで肉詰めをされると、息が詰まって苦しそうだ。喘ぐ上体が前後に揺れて、二つの巨乳も汗を纏って上下に揺れている。

僕は今、桃実とセックスを――。

腰に感じる体重と熱。ヌリユヌリユと熱くペニスを包まれる性快感。勃起から腰の奥までが挿入の喜びで充足されると、もう少年の性衝動は止められなくなった。

「桃実っ、動かすよっ！」

「え：ひやつ――ついたひいつ――ひあああああああああつ！」

――つぶぶ：つぶちぶ：つぶづぶづちゆぶつ、づちゆづぶぢゆぶつつぶつぶつ！

挿んだ女尻を上下させ始めると、少女の肢体が大きく揺さぶられ始める。最初はゆつくりと、しかしすぐに、大きく強く。

破瓜の痛みが引いてくると、女体は深い箇所からの、痺れにも似た性快感を得始めた。裸尻を上下させる少年の両掌に、桃実は素直に従って、拙くも自らヒップを律動。

「あつあつあつあつあつあつあつあつ――わ、わたるちゃんっ――ズンズンっ、強ひいつ――っ！」

痛みでキツく閉じられていた臉は、ウツトリと蕩けるような艶を魅せて、細い眉も八の形に弱々しく下がる。

吐息には湿りが含まれてゆき、少女から女へと、性感で変化してゆくのがハッキリと伝

わってきた。

青空を背景に、布を被って制服を脱ぎかけて、巨乳を露出させながら、自分の上で性感に喘ぐポニーテールの幼なじみ。

上下する双乳に右手を伸ばして揉み上げると、熱くて柔らかい乳肌が指を受け入れて、吸い付くような肌触り。

「あひゃああつ——わたるちゃんつ——むねつ、ジンジンしちゃううつ！」

タップリ巨乳は掌にズッシリと重く、パップルの優しい弾力を感じさせながらも、力を込める指を包むように食い込ませる。

指の間に乳首を挟んで転がすと、裸腰を上下させる少女の背筋が、ピクンつと反れた。「そ、そこわつ——コリコリ、しちやラメへえええつ——っ！」

ダメと言いながら、女体はもつととしてと言わんばかりに、少年へと縋る。乳房を揉む腕に自らの掌を添えると、もう女体は脱力していて、渉の腕に肢体を預けていた。

布を被って、堅いペニスに沿うように、恥汗を纏って上下動する身体。豊かな双乳が上下に揺れて、チラチラと陽光を反射させていた。

勃起を包む微細な褰が、肌に吸い付いて絡みついて、拙くも懸命な愛撫をくれる。

少女の愛情を思わせる熱の微粒で締め付けられると、肉カリの後ろや本体の裏側などの性感帯が、ムチュヌリユと愛撫責めに晒された。

少年の鼓動がドクドクと高まり、腰の奥が力で溢れそうにされてゆく。

早く出したい――。

原初的な欲求に頭まで支配されると、渉の腰が自ら力を込めて、強く激しい腰突きを開始した。

―― つつぶづぶづつぶちゅぶつ、ぢゅぶづぶづちゅぶづちゅぶぢゅぶつ！

「つあああああああつ――わたるちゃつ――わたるちゃんかはつ、ガンガンつ、してくるううううううつ！」

幼なじみの裸尻抽送に合わせて、ズンズンと力強く突き上げる。

熱と蜜に溢れる膣壁は、ギリギリまで引き抜くと離れたくないと吸い付いて、奥まで突き込むともう離れないとキツく抱き締めてくれる。

微細な粒がうねって、更に性弱点をヌルヌル摩擦で刺激されて、勃起の肌全体から腰の奥深くへと、焦らされる力が膨張させられてゆく。

耳の奥が詰まって、自らの鼓動と濡れた肉孔の音と、幼なじみの湿った吐息だけが、全てになる。

手足の先が熱を失い、腰の奥で放出の力として、強く圧縮されてゆく感覚。

もうすぐ、イク。

絶頂が欲しい腰が力んで、力を込められる勃起も、一段と堅く、太くなった。

深く勢いよく突き込むペニスの先が、少し堅くて狭い子宮孔を、肉突く度に強く何度も連続ノック。

「ま、まってへっ——あはっあっあっあっあひゃあああっ——おくうっ——おくズンズンひちちはっ——すぐイっちはああああああっ！」

愛しい少年の堅くて熱い勃起で、特に敏感な子宮の入り口を連打される。熱と肉厚の強くて深い性感で、桃実の言葉が官能にトロける。

上下する裸尻が柔らかく跳ねて、タプタプと艶変形を魅せていた。

眉根が下がって涙を浮かべ、艶々の唇は喘ぎと官能の吐息をこぼしている。汗纏う肌が微細に震えて、乳輪が粒立って乳首も硬化。

「あたひっ——あたひもうラメへええっ——わたるちゃんっ——わたるちゃんがズンズンすごくてへええええええっ——もふうっ、ラメになりゆううううっ！」

自分の突き上げで、女の子が絶頂を求めている。

そんな光景に、男子の征服欲がズンッと強く刺激をされた。

二人の鼓動が重なるのが、繋がった性箇所脈動で解る。

桃実と一緒に——。

そう意識した途端、少年の勃起がゲゲッと熱化する。

受け入れる少女の膣粘膜も、愛しい少年のペニスをヌリユルユッと抱き締め愛撫。



「つわふつ——わたるつ、さまはあああつ——あふつ、はあああつ——そんなにひいつ、つよくつ——つきあげられてわはあああああつ!」

少年の突き上げが、予想以上に強い性感だったらしい。瞼が閉じそうなほどの快感に翻弄されながら、膣壁は更にキツく熱く、勃起に縋る。

一突きごとにヒップが震えて、引き締まった下腹部が微細に痙攣をして、細いウエストが前後に波打つ。

上体は完全に脱力をして、今にも倒れてしまいそうだ。

Hカップが激しく跳ねて、先端の媚突も桃色を強める。乳房を揉み上げる渉の両腕に細い手を添えて、縋るように上体を支えていた。

突き上げられて、最初は困惑していた少女の肢体は、しかしすぐに天性の才能を発揮。女体の性感上下動に従いながらも、少年の抽送に合わせて裸尻の前後動を見せ始めた。

「はひっ——わたるさまはあああつ——あああうつ——わたくしのつ、からだがはっ——わたるさまにひっ——わたるさまの、ものにひいひいひいっ——っ!」

少年の抽送に合わせながら、しかもペニスの反り返りにも合わせて、腰を卑猥に蠢かし続ける。

腰を引くと、拙くも裸尻を後ろに向けて、ペニスの裏側弱点を吸着愛撫。深く突き込むと少女腰を恥ずかしげに前へと差し出して、鈴口まで密着する膣壁奉仕。

引いても突いても勃起を締め付け、更に性弱点を確実に愛撫する、莉凜の女体だ。
(り、莉凜すごい……っ！)

熱い濡れ膣壁でヌルニユルに締め付けられて責められると、少年の肉体は射精に向かって全速力。

心臓はドキドキと高鳴って、全身の熱もカアッと上がる。

腰の奥が焦れつつたく力をためられて、もう早く、頂点が欲しい。

渉は爆乳を強く揉み上げながら、腰の突き上げを強く早めた。

——つつづちゅづちゅりゅづぶづぶゆづちゅぶつ、づちゅづちゅずちゅづちゅつ、づぶづちゅずぶずちゅづぶちゅづちゅぶづぶづちゅつ！

真下からの強い肉責めに、黒髪少女の女体が、激しい性感灼けに晒されてゆく。

「わっ、わたるさまはあああつ——そんなつ、はひつ、はやあああつ——おくがどんどんしてへっ——どんどんつきあげられてへえええつ——っ！」

堅い勃起が突き込まれる度に、子宮の入り口が熱いノックで連打をされる。子宮から腰全体が性感で痺れて力が抜けて、上体は今にも崩れそう。

しかし本能で性感を求める少女の腿は、少年の抽送に合わせた上下動を、更にリズムカ
ルに弾ませて、肉責めを全身で甘受し続ける。

弾む巨尻がプルッと汗を散らして、白い肌は紅葉色に艶めいて、熱を上げてゆく。細い

お腹は肉突きを受けとめ続けてくねり、繊細な背中も熱い性甘電で強く仰け反る。

双つの爆乳は少年の両掌に揉み遊ばれながら、タツプリの柔らかか脂肪をタプタプと弾ませて暴れている。

性感に蕩ける臉は閉じそうなほど蕩けていて、瞳も脣も女の喜びに濡れていた。少女の官能姿は、女の淫美、そのものに見える。

「り、莉凜…凄…」

「…ですね…なんだか、わたしもまた…♡」

既に達していた桃実と華が、涉と莉凜のセックスに感化される。

絶頂と中出しで満たされた身体を、四つん這いの姿勢で少年に近づけると、左右に寝転がってサンドイッチ。

「わたるさん…ちゅ♡」

「わたるちゃん…ぺろ…ちゅぷ…♡」

右の頬にキスをされて、左の耳を舌愛撫される。

「うひゃっ——ふ、二人とも…っ！」

何だか、イタズラな仔猫に懐かれているようで、くすぐったいの…に気持ち良い。少女たち…に脣愛撫を施されると、勃起は更に力を得る。

桃実たちの掌で、胸やお腹を愛撫されると、それだけで、複数の女の子に受け入れられ

ていると実感出来る。

それは幸せて、少年の支配欲を強く満たして、肉欲も同じく増大させていった。

更に二人は、莉凜の乳房や内腿にも手を伸ばす。敏感な媚突を指の腹で愛撫して、熱い内腿を繊細な指先でスベスベと、撫でて柔らか刺激。

「ひゃああああああんっ——も、ももみさんっ、はなさんっ——そんな、やさしくふううっ！」

少女特有の柔らかいタッチで愛撫をされると、莉凜の肢体も更に高揚。頬も耳も首筋も真っ赤になって、全身が拙くも深く蕩け、膣壁は更に蜜を溢れさせた。

「り、りりちゃんも…わたるさんも…わ、わたしもふっ——っ！」

愛撫に参加しているだけなのに、桃実と華の女体も莉凜の官能に引っ張られて、また頂点へと上げられてゆくようだ。

熱い女体を少年の腕にすり寄せて、左右から巨乳で渉の upper body を、むにゆりぬりゆり、と押しつけ愛撫。

筋肉質な少年の身体との密着感が、少女たちの肢体を熱く高めて、更にもっと密着したいと、濡れた裸身をすり寄せてくる。

莉凜の左右のヒザと、二人の秘処が擦れ合って、溢れる恥蜜は渉の腿にも、微細な糸を引いていた。

「はあああつ——また、あたしひつ——わたるちゃんつ——りりいっ——つ！」
二人の性感に充てられると、渉と莉凜の肉体が強すぎる性感に包まれて、絶頂に向かつて跳躍してゆく。

少女の肢体が上下動に合わせて恥汗を散らし、下腹部の痙攣は、絶頂直前を少年に伝えている。

突き上げる勃起は、全体が無数に吸い付かれてジリリつと連続甘電。堅い熱肉から腰の奥へと溜められる力は、もう一瞬だって早く、放出を求めている。

全身の熱が手足の先から腰の奥へと集められて、少女たちの艶声と濡れた肉孔の音だけが、全ての音になる。

もう、出したい——。

そう無意識が求めたと同時に、四人の脳裏が真っ白に発光。

交わる二人と達したばかりの二人、四人が同時に、絶頂を迎えた。

その瞬間に、少年は強く腰を引いて、全力で一気に最奥まで。

——つつぶゅつつ!!

子宮口を強く貫通された莉凜が、より深い絶頂へと、突き上げられた。

「つ————つわつ、わたるさまあああああああああああつ!!」

白い肌が一瞬で紅葉色に染まり、しなやかな全身が強くしなつて痙攣を魅せる。大きな



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!